

刊行にあたって

歯科医学の基本といえるプラークコントロールの意義は、口腔病原微生物叢から健全な口腔正常細菌叢に移行させることです。本書は、そのなかでもきわめて専門性の高いハイリスクアプローチである Dental Drug Delivery System (3DS) を中心に、除菌という狭い技術論にとどまらず、口腔の健康を達成するために必要な概念やその関連分野についても触れています。

3DS に関するマニュアルガイドブックである『チェアサイドの 3DS ってなに？ガイドブック』が初版刊行されてから、早いもので 7 年が経過しました。この間、う蝕細菌検査に加え、歯周病関連菌検査、宿主側の歯科臨床検査等が整備され広く普及した結果、それら検査の異常値を正常値に戻すような歯科医療が実施されてきています。

3DS は当初、主にう蝕細菌に関する除菌技術として紹介されましたが、歯周病原性バイオフィルムの抑制にもきわめて有効であることが明らかになりました。また、3DS に関するデータも蓄積され、その有効性と限界などが明確になってきました。こうした経緯から、初版の基本的ガイドブックの内容を掘り下げて、より幅広い解説を加えたほか、歯周病の 3DS や臨床栄養管理などの項目を追加し応用編としたのが本書です。

近年は、疾病を重症化させないための方策が潮流であり、生活習慣病を専門とする医科では、メタボリックシンドロームという強力なコピーを国民に浸透させ、その予防に取り組んでいます。歯科領域でも、新しい概念として Periodontal medicine と総称される、歯周病と全身疾患との関連研究が盛んに報告されています。こうした潮流に従えば、歯科医療者はう蝕や歯周病を単なる口腔の局所疾患と狭く捉えずに、う蝕は“糖質の過剰摂取の状態”、歯周病は“歯肉の微少循環障害による血管疾患”であるという認識のもとに、全身の代謝改善までを包括的に捉えた診療に努めるべきであると考えます。

咀嚼機能の低下から栄養摂取状態が悪化し、代謝性疾患へとドミノ倒しのように続く疾患の負の連鎖は、もとをただせば、う蝕や歯周病の細菌感染症に一部端を発しているのです。本書を手にした先生方が、咀嚼機能の回復から全身の健康までを大局的に見据えた一連の歯科医療のなかで、3DS を疾患制御の上流部分を担う医療技術として、活用されることを願っております。

2009 年 6 月

武内博朗